

17.5.2004

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2003年 6月 5日

出願番号
Application Number: 特願2003-160342
[ST. 10/C]: [JP2003-160342]

出願人
Applicant(s): 株式会社エクス・リサーチ

REC'D 15 JUL 2004

WIPO

PCT

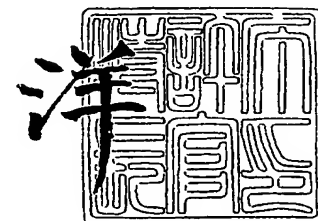
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 7月 2日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

小川



【書類名】 特許願

【整理番号】 EQ03-024

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 H01M 8/02
H01M 4/96
C01B 21/00
C01B 25/00

【発明者】

【住所又は居所】 東京都千代田区外神田 2 丁目 1 9 番 1 2 号 株式会社エ
クォス・リサーチ内

【氏名】 長谷川 規史

【特許出願人】

【識別番号】 591261509

【氏名又は名称】 株式会社エクォス・リサーチ

【代理人】

【識別番号】 100095577

【弁理士】

【氏名又は名称】 小西 富雅

【選任した代理人】

【識別番号】 100100424

【弁理士】

【氏名又は名称】 中村 知公

【選任した代理人】

【識別番号】 100114362

【弁理士】

【氏名又は名称】 萩野 幹治

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 045908

【納付金額】 21,000円

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2003-139431

【出願日】 平成15年 5月16日

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 0201688

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 混合伝導体及びその製造方法

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 無機材料からなる電子伝導体に無機材料からなるプロトン伝導体を水に溶けないように固定化したことを特徴とする混合伝導体。

【請求項 2】 有機材料を炭素化した無機材料からなる電子伝導体に無機材料からなるプロトン伝導体を固定化したことを特徴とする混合伝導体。

【請求項 3】 前記電子伝導体は、脂肪族系炭化水素、芳香族系炭化水素若しくはそれらの誘導体の内、少なくとも 1 種を炭素化したものであることを特徴とする請求項 1 記載の混合伝導体。

【請求項 4】 前記電子伝導体はポリアセチレン、レソルシノール、フェノール、2-フェニルフェノール、ポリアニリン、ポリピロール、ポリチオフェン、フェニルホスホン酸、フェニルシランアルコキシド類の少なくとも 1 種を含む、ことを特徴とする請求項 2 に記載の混合伝導体。

【請求項 5】 前記電子伝導体は、グラファイト及びカーボンナノチューブ等の炭素質材料であることを特徴とする請求項 1 に記載の混合伝導体。

【請求項 6】 前記プロトン導電体は、リン元素を含む化合物、イオウ元素を含む化合物、カルボン酸、ホウ酸、無機固体酸の内、少なくとも 1 種を含有することを特徴とする請求項 1 に記載の混合伝導体。

【請求項 7】 前記固定化は、共有結合により行われることを特徴とする請求項 1 ないし 6 のいずれかに記載の混合伝導体。

【請求項 8】 前記固定化は、インターカレーションにより行われることを特徴とする請求項 1 ないし 6 のいずれかに記載の混合伝導体。

【請求項 9】 前記固定化は、包接により行われることを特徴とする請求項 1 ないし 6 のいずれかに記載の混合伝導体。

【請求項 10】 前記電子伝導体は、二重結合を含む炭素の連続的な結合をもつことを特徴とする請求項 1 記載の混合伝導体。

【請求項 11】 前記電子伝導体は、炭素の二重結合あるいは三重結合もしくは両方を有する有機化合物を炭素化させたものであることを特徴とする請求項

1 記載の混合伝導体。

【請求項 1 2】 炭素の二重結合あるいは三重結合もしくは両方を備えた有機物とプロトン伝導材料を重合させた高分子前駆体を得る第一工程と、

該第一工程により得た前駆体を不活性雰囲気中で焼成する第二工程と、を有することを特徴とする混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 3】 炭素の二重結合あるいは三重結合もしくは両方を備えた有機化合物の重合体中にプロトン伝導材料を分散させた高分子前駆体を得る第一工程と、

該第一工程により得た前駆体を不活性雰囲気中で焼成する第二工程と、を有することを特徴とする混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 4】 前記炭素の二重結合あるいは三重結合もしくは両方を備えた有機化合物は、脂肪族系炭化水素、芳香族系炭化水素であることを特徴とする請求項 1 2 又は 1 3 記載の混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 5】 前記有機化合物は、ポリアセチレン、レソルシノール、フェノール、2-フェニルフェノール、ポリアニリン、ポリピロール、ポリチオフェン、フェニルホスホン酸、フェニルシランアルコキシド類のうち少なくとも 1 つであることを特徴とする請求項記載 1 4 の混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 6】

前記プロトン伝導材料は、リン元素を含む化合物、リン酸、リン酸エステル、硫酸、硫酸エステル、スルホン酸、水素化酸化タングステン、水素化酸化レニウム、酸化ケイ素、酸化スズ、酸化ジルコニア、タングストリン酸、タングスト珪酸、酸化ケイ素のうち少なくとも一つであることを特徴とする請求項 1 2 又は 1 3 記載の混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 7】 π 結合を有する有機化合物とプロトンが移動可能な基を有する化合物とを脱水縮重合して結合させプロトン伝導性を有する前駆体とし、該前駆体を不活性ガス雰囲気中でエネルギーを与えて電子伝導性を持たせたことを特徴とする混合伝導体の製造方法。

【請求項 1 8】

前記混合伝導体には貴金属触媒が担持されていることを特徴とする請求項 1 な

いし 11 のいずれかに記載の混合伝導体

【請求項 19】

さらに、前記第二工程で焼成された前駆体に貴金属触媒を担持させる第三工程を備えたことを特徴とする請求項 12 又は 13 記載の混合伝導体の製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】

この発明は電子伝導性とプロトン伝導性とを併せ持った混合伝導体に関する。この混合伝導体は燃料電池の電極の反応層、ガス拡散触媒などに利用することができる。

【0002】

【従来の技術】

燃料電池の反応層は電解質膜と拡散層との間に形成され、電気化学反応を促進するための触媒が担持されている。前記反応層と前記触媒層とが結合して燃料電池の電極を構成する。例えば空気極側の反応層においては、電解質膜を通過してきたプロトンと空気極に伝達される電子とが触媒にまで伝導され、当該触媒上に拡散してきた酸素とプロトンとを結合させる。即ち、酸素とプロトンと電子の伝達ロス改善のために、当該反応層はプロトン伝導性と電子伝導性とを併せ持つ必要がある。そのため、表面に触媒を担持したカーボン粒子（電子伝導性）とイオン伝導性を有するナフィオン（商標名；デュポン社、以下同じ）等の有機高分子材料とを混合して使用していた。

【0003】

しかしながら、イオン伝導性を有する物質と電子伝導性を有する物質を併用する場合には、両者を完全に均一に混合することが困難であるので、全触媒粒子へプロトンと電子を均等に伝達することが出来ない。

そこで、一つの材料においてイオン伝導性と電子伝導性を併せ持った混合伝導体が提案されている。

例えば、特許文献 1～4 に有機系の混合伝導体が開示されている。

また、特許文献 5～8 には、電子と酸素イオンを伝達する無機系の混合伝導体

が開示されている。

【0004】

【特許文献1】

特開 2001-202971 号公報

【特許文献2】

特開 2001-110428 号公報

【特許文献3】

特開 2003-68321 号公報

【特許文献4】

特表 2002-536787 号公報

【特許文献5】

特開平 10-255832 号公報

【特許文献6】

特開平 11-335165 号公報

【特許文献7】

特開 2000-251533 号公報

【特許文献8】

特開 2000-18811 号公報

【0005】

【発明が解決しようとする課題】

上記有機系の混合伝導体においては、有機材料であるがゆえに耐久性や耐熱性の点で実用化までに解決すべき課題が多い。

他方、電子と酸素イオンを伝達する無機系の混合伝導体においてその稼動温度が高温であるので（800℃程度）、例えば車両や携帯に適した小型の燃料電池には不適な場合が想定される。

【0006】

【課題を解決するための手段】

本発明者は、上記課題を解決すべく鋭意検討を重ねてきた結果、新規な無機系の混合伝導体を見出し、本発明を完成するに至った。

即ち、無機材料からなる電子伝導体に無機材料からなるプロトン伝導体を水に溶けないように固定化したことを特徴とする混合伝導体、である。

【0007】

ここに、無機材料からなる電子伝導体としては、図1及び図2に示すように、主鎖に炭素の二重結合、三重結合及び両者を有し、当該主鎖が電子伝導機能に寄与するタイプのほか、側鎖を介して電子を伝導させるタイプであってもよい。

さらにこのような電子伝導体は π 結合を有する有機化合物を炭化して無機材料にして使用すると好適である。 π 結合を有する有機化合物は脂肪族系炭化水素、芳香族系炭化水素若しくはこれらの誘導体であり、これらのうち少なくとも1種が用いられる。これらの有機化合物の代表的なものとして、ポリアセチレン、レスルシノール、フェノール、2-フェニルフェノール、ポリアニリン、ポリピロール、ポリチオフェン、フェニルホスホン酸、フェニルシランアルコキシド類を用いることができる。

また、電子伝導体は無機材料としてグラファイトやカーボンナノチューブ等の炭素質材料や金、パラジウム、白金、マグネシウム、リチウム、チタニウム等の金属やその合金を含む金属材料でも可能である。

無機材料からなるプロトン伝導体としては、リン元素を含む化合物、イオウ元素を含む化合物、カルボン酸、ホウ酸、無機固体酸を用いることができ、特にリン元素を含む化合物、リン酸、リン酸エステル、硫酸、硫酸エステル、スルホン酸、水素化酸化タングステン、水素化酸化レニウム、酸化ケイ素、酸化スズ、酸化ジルコニア、タングストリン酸、タングスト珪酸、酸化ケイ素のうち少なくとも一つを用いることができる。

【0008】

この発明では、これら無機系の電子伝導体とプロトン伝導体とが水に溶けないように相互に固定化されている。

水に溶けない固定化の態様として、共有結合、インターカレーション及び包接が考えられるが、製造過程の条件によりこれらの各態様が混在する可能性もある。

また、電子伝導体及びプロトン伝導体の材料の種類に応じて、固定化の状態が

共有結合、包接、インターカレーションをとるのか否かが変化する。例えば、電子伝導体に有機材料を炭化して無機材料とした場合には共有結合が主になると考えられる。他の例として電子伝導体に金属材料を選んだ場合、プロトン伝導体材料として無機材料、特に酸化物を選択すれば共有結合若しくは包接で固定化が可能となる。

電子伝導体とプロトン伝導体とが共有結合により固定された状態が図1及び図2に例示されている。共有結合された電子伝導体1、3とプロトン伝導体2とはその距離が非常に近接するので、図示のとおり、ナノオーダの触媒粒子（例えば白金等）に対してともに接触することができ、従って、触媒反応に必要な電子とプロトンを過不足なく供給することが可能となる。

【0009】

このような混合伝導体は次のようにして形成される。

まず、 π 結合を備えた有機化合物とプロトン伝導性材料とを重合させた高分子前駆体を形成する。この高分子前駆体において、有機化合物の骨格をなす炭素はそれ同士が重合して π 結合を有する電子伝導性の主鎖を形成するとともに、プロトン伝導体との間にも共有結合を形成し、このプロトン伝導体が電子伝導体の炭素主鎖を架橋する構成となると考えられる。充分な量のプロトン伝導体を配合することにより、炭素主鎖に共有結合したプロトン伝導体同士の距離が小さくなり、その間においてプロトン伝導性が生じることとなる。

【0010】

また、 π 結合を備えた有機化合物の重合体中にプロトン伝導体を分散させた前駆体を準備してもよい。

有機化合物とプロトン伝導体との重合度が小さい場合、結果として、有機化合物の重合体中にプロトン伝導体が分散された前駆体となる。また、当該重合度が不十分な場合、電子伝導体を構成する有機化合物に共有結合したプロトン伝導体とこれから分離して実施的に分散状態にあるプロトン伝導体が並存する前駆体となる。

【0011】

このような前駆体を不活性雰囲気下で焼成する。これにより、有機化合物が炭

化して無機物となって、電子伝導性が確保される。

そして、当該電子伝導性の炭素骨格にプロトン伝導体が安定して固定化されている。これにより、プロトン伝導性が確保される。プロトン伝導性は、プロトン伝導体付与材が近接することにより得られると考えられる。図1及び図2に示すように、プロトン伝導体が炭素骨格を架橋する場合は、プロトン伝導体の位置が固定されるので当該プロトン伝導体同士の相互作用によりプロトン伝導性が確保される。

プロトン伝導体が炭素骨格より脱離した場合、および前駆体の状態から炭素骨格に結合していない場合は、炭素主鎖の間にインターカレートされるか若しくは炭素主鎖が形成する網目構造の中に包接されることが考えられる。これらの場合においても、プロトン伝導体同士が近接していれば、プロトン伝導性を得られると考えられる。

このようにプロトン伝導体が炭素骨格間に結合、インターカレーション若しくは包接されているので、プロトン伝導体が浮遊することがないので、水が存在する場所で混合伝導体を使用したとしても、水によってプロトン伝導体が流れ出てしまうことがない。即ち、水によってプロトン伝導度が低下する割合は非常に低い。

【0012】

ここに、 π 結合を備えた有機化合物として不飽和脂肪族炭化水素若しくは芳香族炭化水素を挙げることができる。より具体的には、ポリアセチレン、レソルシノール、フェノール、2-フェニルフェノール、ポリアニリン、ポリピロール、ポリチオフエン、フェニルホスホン酸、フェニルシランアルコキシド類のうち少なくとも1つを選択することができる。

また、プロトン伝導性材料としてリン元素を含む化合物、イオウ元素を含む化合物、カルボン酸、ホウ酸、無機固体酸を用いることができる。リン元素を含む化合物としてはリン酸が挙げられ、イオウ元素を含む化合物としては主に硫酸、スルホン酸が挙げられる。さらにはこれらの化合物の誘導体を出発原料として無機のプロトン伝導性材料を作成することも可能である。特に、リン元素を含む化合物、リン酸、リン酸エステル、硫酸、硫酸エステル、スルホン酸、水素化

酸化タングステン、水素化酸化レニウム、酸化ケイ素、酸化スズ、酸化ジルコニア、タングストリン酸、タングスト珪酸、酸化ケイ素のうち少なくとも一つを用いることができる。

【0013】

前駆体の有機化合物を無機化するためには、前駆体を不活性雰囲気下において焼成することが好ましい。

不活性雰囲気は、前駆体を窒素ガスやヘリウムガス流通下におくこと、若しくは真空化におくことにより達成できる。

かかる不活性雰囲気下で前駆体を加熱すると有機成分が炭化して無機物となる。有機成分の主鎖が π 結合を有するものであるとき、高い電子伝導性が得られる。

加熱温度及び加熱時間は前駆体の特性に応じて適宜選択される。

【0014】

当該加熱と同時に若しくは加熱後に、熱以外の高エネルギーを付加することもできる。高エネルギーとしてプラズマ照射、マイクロ波照射、超音波照射等を挙げることができる。

【0015】

【発明の効果】

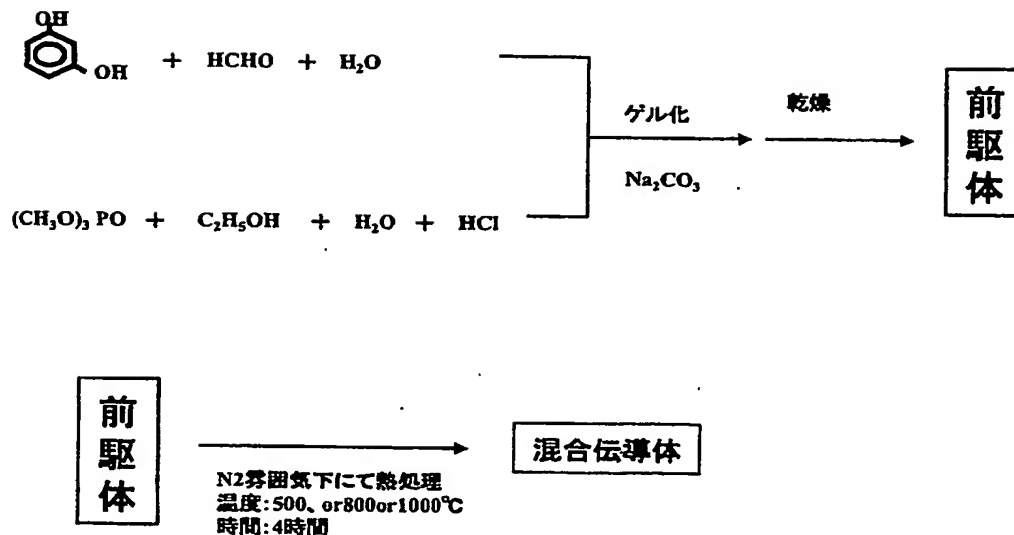
以上説明したように、この発明の混合伝導体は無機材料系において電子伝導機能とプロトン伝導機能を併せ持つ。また、室温程度の低温度域においても混合伝導体として機能する。また、水存在下でも安定して電子伝導とプロトン伝導が機能する。

【実施例】

以下、この発明の混合伝導体の上記効果を実施例により確認する。

まず、混合伝導体の製造方法を下記化学式1及び図3、図4を参照しながら説明する。

【化1】



【0016】

レソルシノール (10 g) とホルムアルデヒド (13 ml) を水 (40 ml) に溶かし、当該溶液にリン酸トリメチルを加水分解した溶液を加える。かかる溶液を Na₂CO₃ を触媒として脱水縮合させゲル化する。このゲルを 120℃ の条件で乾燥することにより、前駆体を得る (図3 参照)。

この前駆体を窒素雰囲気下で熱処理 (500℃～1000℃)、実施例の混同伝導体を得る。この混同伝導体は、図4に示すように、グラファイト類似骨格を有する電子伝導体相7、7とリン酸基のプロトン伝導体相9が交互に並ぶ構成となる。

【0017】

得られた上記の混合伝導体は一旦粉碎され、その後、プレス成形して板状とし、これを集電板で挟み込んで直流電流を印加し、そのときの電圧から各実施例の比抵抗を得た。測定温度は室温である。

	実施例 1	実施例 2	実施例 3
熱処理温度	500℃	800℃	1000℃
比抵抗 (Ω · cm)	138	0.35	0.13

上記において、加熱温度が500℃の場合に比抵抗が大きいのは、有機物の炭素化が不十分であったためと考えられる。

加熱温度や加熱時間は、有機化合物の骨格等に応じて適宜選択可能なパラメータである。

【0018】

次に、プロトン伝導性の試験について図5及び図6を用いて説明する。

図5に示すように、実施例1～3の試料11の両サイドに触媒層15、カーボンをクロスからなる拡散層17をとりつけた。ナフィオン膜13はプロトンは透過するが電子はブロックするものである。

図5のホルダーを容器中に入れて、当該容器へ60℃、湿度100%の窒素ガス若しくは水素ガスを導入する。そのときの電圧電流特性を図6に示す。

【0019】

図6から、窒素ガス導入中においては拡散層17、17間に電圧を印加しても電流が流れず、その一方、水素ガスを導入すると電流が流れを確認できた。これにより、試料11にプロトン伝導性のあることが確認できる。

また試料中のプロトン伝導度は下記のように算出された。

	実施例 1	実施例 2	実施例 3
熱処理温度	500℃	800℃	1000℃
プロトン伝導度	2.6×10^{-3}	1.3×10^{-3}	7.3×10^{-4}
	(S/cm)		

さらに比較例として既述の実施例の作成法にてリン酸トリメチルを添加せずに、同様に熱処理した試料のプロトン伝導度は下記のように算出された。

	比較例 1	比較例 2	比較例 3
熱処理温度	500℃	800℃	1000℃
プロトン伝導度	1.0×10^{-6} 以下	1.0×10^{-6} 以下	1.0×10^{-6} 以下
	(S/cm)		

リン酸トリメチルを添加した場合と添加していない場合の試料を比較することで、リンによるプロトン伝導度の出現が証明された。

【0020】

各実施例の試料（0.1 g）を室温の純粋中 100 cc 中に浸漬し、浸漬時間とリンの残存率の関係を図 7 に示す。

図 7 において、リンの残存率は EDX 分析装置を用いて測定した。

図 7 の結果から、実施例 1 の試料では約 60%、実施例 2 の試料では約 80%、実施例 3 の試料では約 90% のリン（即ちプロトン伝導体）が残存していることが確認できる。

これにより、実施例の混合伝導体においては、湿潤環境においても長期間にわたりプロトン伝導作用が維持されることがわかる。

尚、上記の混合伝導体は燃料電池に用いることができ、特に燃料電池を構成する反応層（触媒層）に用いると好適である。この反応層は、（ガス）拡散層を経て外部から供給される酸素又は水素がイオン化する場所で、通常、電解質膜とガス拡散層の間に配置されている。

次に、上記混合伝導体を反応層（触媒層）として用いる場合の反応層の製造方法の一例を説明する。

（例 1）

上記製造された混合伝導体をボールミル等で粉碎して粉末化し、この粉末化された混合伝導体に白金触媒を担持する。この担持は、例えば、通常の燃料電池の反応層を構成する白金担持カーボンを作成する場合の工程におけるカーボン担体上に白金触媒を担持させるのと同様の手法により行うことが出来、一例を挙げれば、塩化白金酸溶液を上記混合伝導体の粉体に含漬した後、還元処理することにより行うことが出来る。

次に、ナフィオン溶液に触媒担持した上記混合伝導体を混入して、これらが混合したペーストを作製し、このペーストを電解質膜（この例では、ナフィオン膜）の両面にスクリーン印刷する。このようにして混合伝導体を含む反応層を形成する。さらに、反応層の外側に拡散層を接合することで、燃料電池を構成する単位燃料電池、即ち、単位セルを製造することができる。

（例 2）

上記製造された混合伝導体をボールミル等で粉碎して粉末化し、この粉末化され

た混合伝導体に白金触媒を担持する。

次に、触媒を担持した混合伝導体の粉末をホットプレスすることにより、目的とする電極形状に対応するように成型して反応層を製作する。この反応層と電解質膜とを積層してホットプレスを行うことにより、電解質膜を反応層で挟持するような一体成形品を作る。

さらに、触媒層の外側に拡散層及を接合することで、燃料電池の単位セルを作製することができる。

【0021】

以上の各試験において、実施例の混合伝導体は室温乃至60℃という低温でそれぞれプロトン伝導性と電子伝導性の機能を発揮した。水の有無の状況にもよるが無加湿雰囲気では200℃までは同等の機能を奏するものと考えられる。

従来の無機系の混合伝導体は800℃程度の高温においてその機能を発揮したものと比べると、実施例の混合伝導体が極めて低い温度においても機能することがわかる。

また、図4の構造から明らかなように、電子伝導体相7とプロトン伝導体相9とは共有結合で連結されているため、両者は極めて近接している。そのため、触媒粒子が微小であっても電子伝導体7とプロトン伝導体9は常に同時に触媒粒子に接触することができる。これにより、触媒反応に必要な電子とプロトンを過不足なく触媒へ供給することが可能となり、触媒の利用効率を向上させることができる。

【0022】

この発明は、上記発明の実施の形態及び実施例の説明に何ら限定されるものではない。特許請求の範囲の記載を逸脱せず、当業者が容易に想到できる範囲で種々の変形態様もこの発明に含まれる。

【図面の簡単な説明】

【図1】

図1はこの発明の混合伝導体の構造を示す模式図である。

【図2】

図2もこの発明の混合伝導体の構造を示す模式図である。

【図 3】

図 3 は前駆体の構造を示す模式図である。

【図 4】

図 4 は実施例の混合伝導体の構造を示す模式図である。

【図 5】

図 5 は実施例の混合伝導体のプロトン伝導機能を確認するためのホルダの模式図である。

【図 6】

図 6 は図 5 のホルダの電流電圧特性を示すチャートである。

【図 7】

図 7 は実施例の混合伝導体の純粋中におけるリン酸残存率の時間変化を示すチャートである。

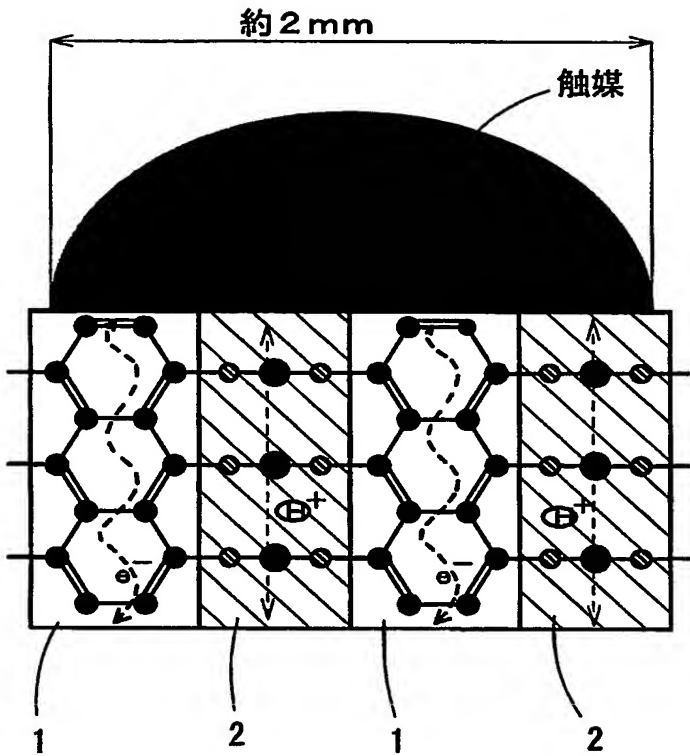
【符号の簡単な説明】

- 1 3、7 電子伝導体相
- 2、9 プロトン伝導体相
- 11 試料

【書類名】

図面

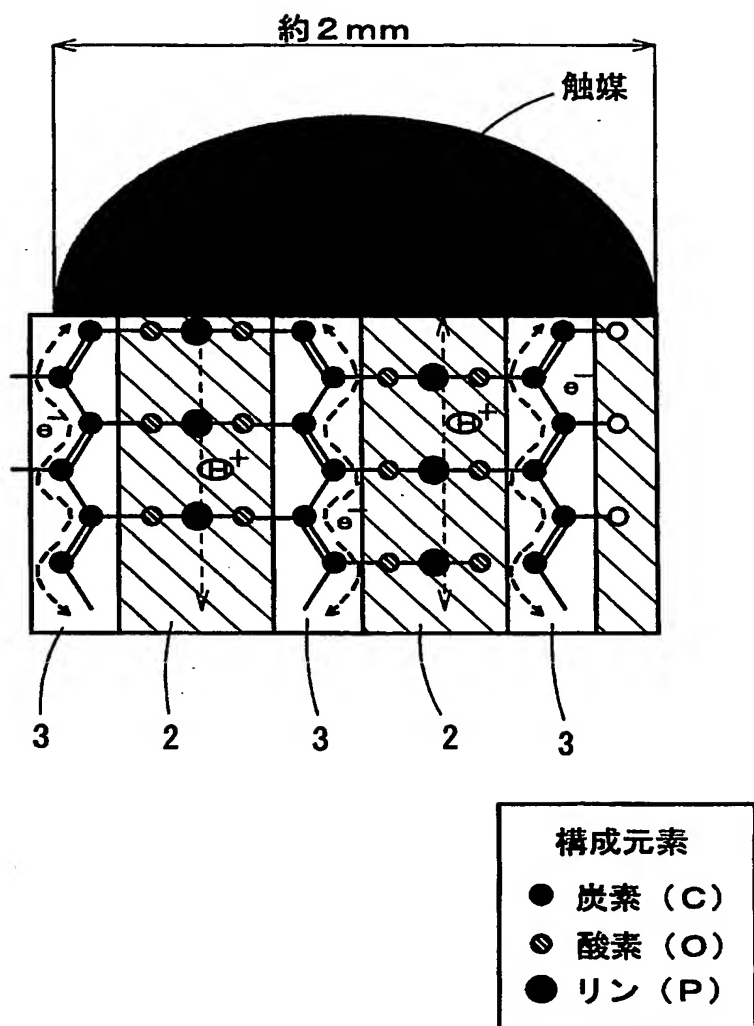
【図 1】



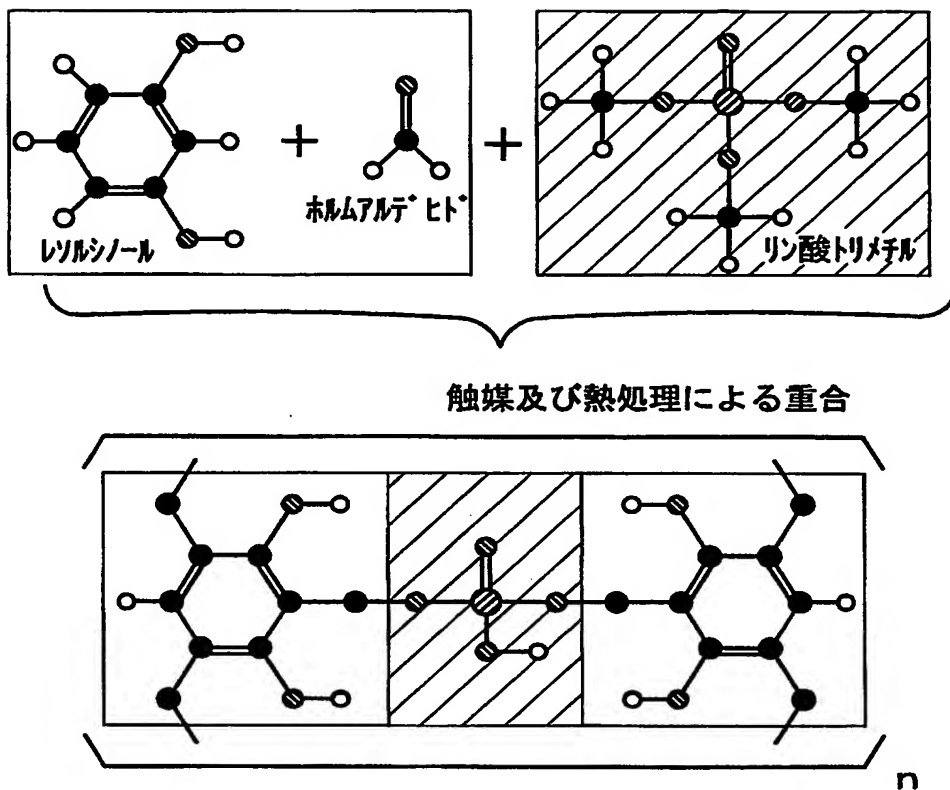
構成元素

- 炭素 (C)
- ⊗ 酸素 (O)
- リン (P)

【図 2】



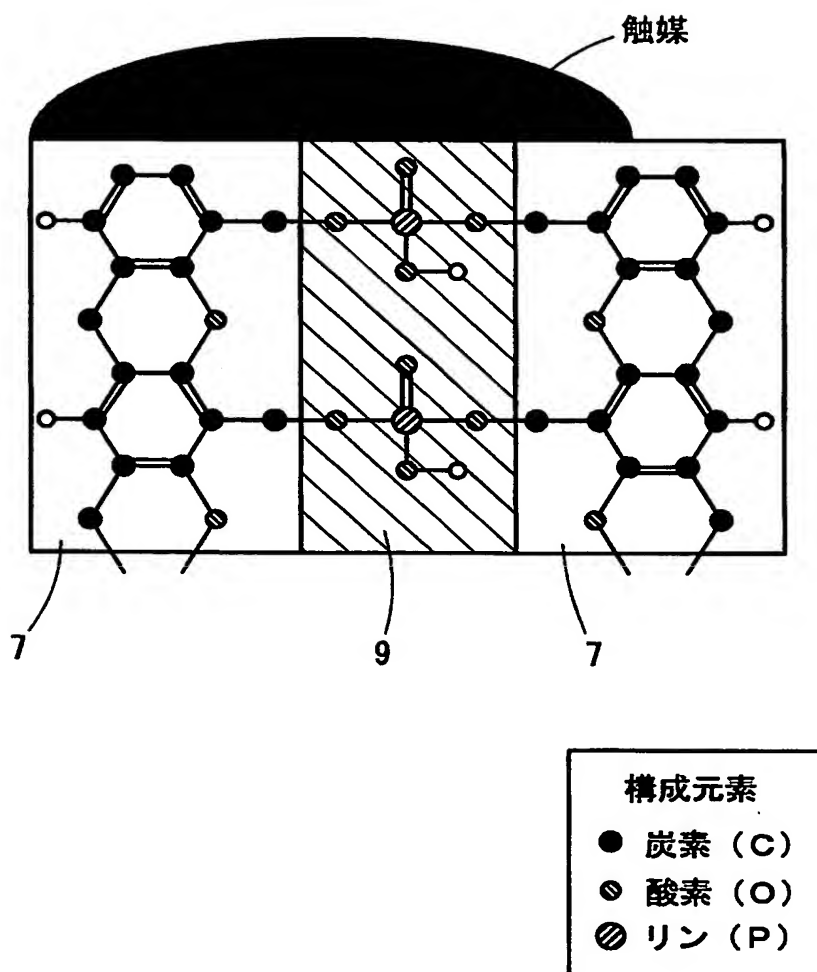
【図 3】



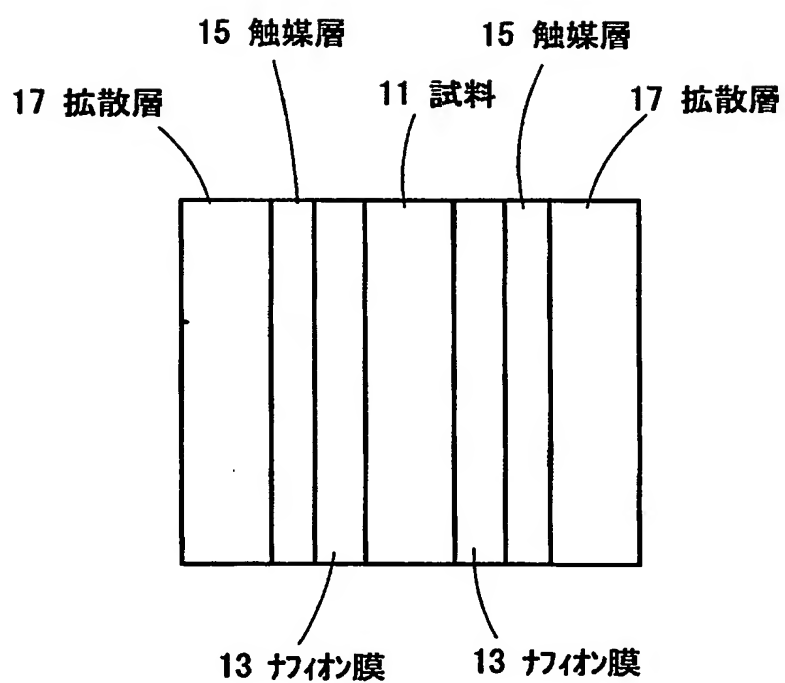
構成元素

- 水素 (H)
- 炭素 (C)
- ⊙ 酸素 (O)
- ⊗ リン (P)

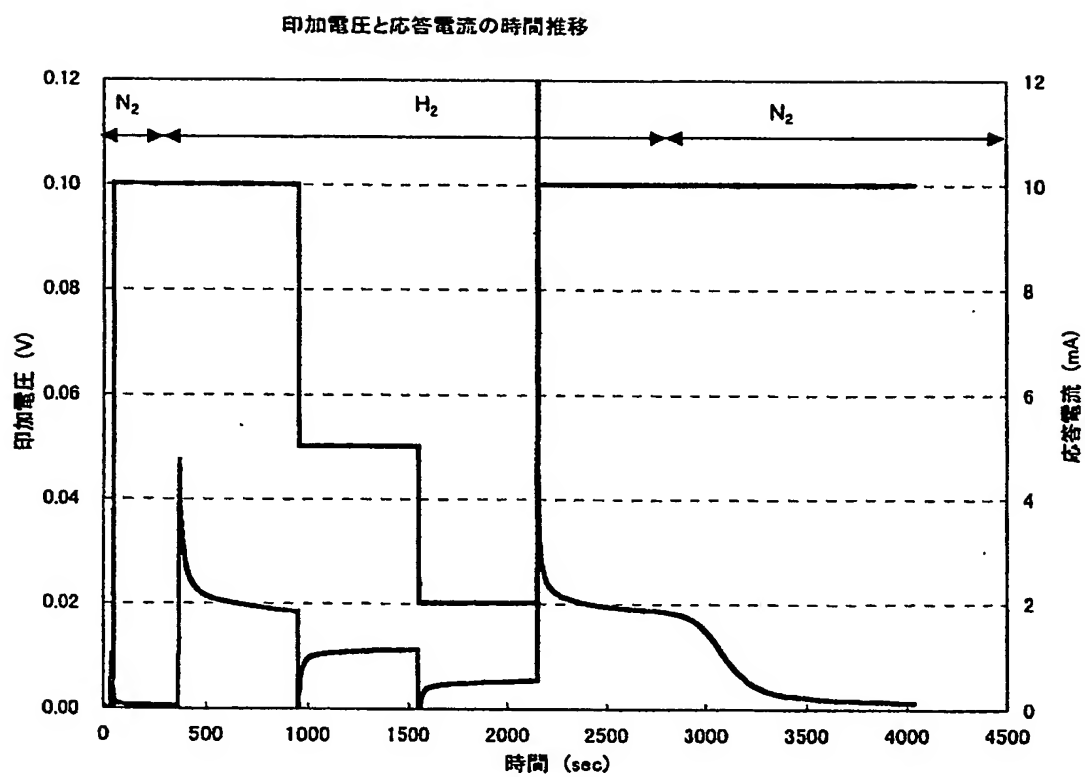
【図 4】



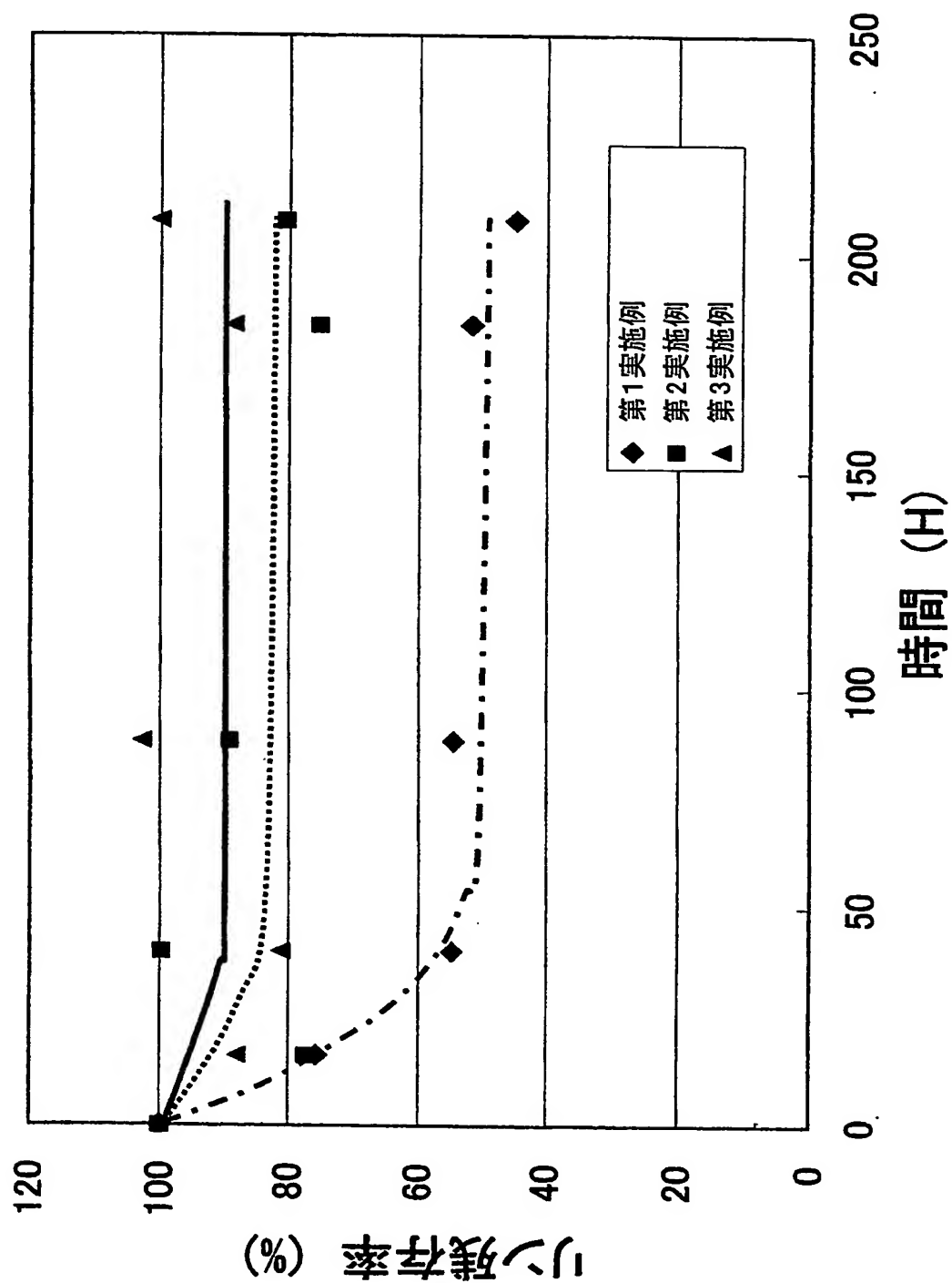
【図 5】



【図 6】



【図 7】



【書類名】 要約書

【要約】

【目的】 低温で機能する無機系の混合伝導体を提供する。

【構成】 この発明の混合伝導体は、主鎖に π 結合を有することにより電子伝導性を備えた炭素系無機材料からなる電子伝導体と、プロトン伝導性を有する無機材料からなるプロトン伝導体とを有し、これらが共有結合、インターカレーション及び／又は包接により固定化されている。

【選択図】 図 4

認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2 0 0 3 - 1 6 0 3 4 2
受付番号	5 0 3 0 0 9 4 2 2 9 4
書類名	特許願
担当官	第五担当上席 0 0 9 4
作成日	平成 1 5 年 6 月 1 0 日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成15年 6月 5日
-------	-------------

次頁無

特願 2 0 0 3 - 1 6 0 3 4 2

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [5 9 1 2 6 1 5 0 9]

1. 変更年月日 1 9 9 1 年 1 1 月 2 2 日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都千代田区外神田 2 丁目 1 9 番 1 2 号

氏 名 株式会社エクス・リサーチ